



1取材用ノートと愛用のカメラ。ノートはすぐに取り出せるよう、ポケットに入れるので真ん中に線が入る2特集記事は企画から、レイアウト、取材、撮影、文章まで、一番時間のかかる「広報の顔」。一枚の紙に、誌面の配置を何度も書き直して、イメージをふくらませる



3「人が見ていない視線で撮ると、新鮮な写真になる」と水面ギリギリまでカメラを近づけ、アングルを変えて表紙の写真を撮影4「インタビューを受けてくれた人の真意に近づきたい」と事前に下調べをし、さらに質問を投げかける姫野さん



湯前の人やものへの愛情を込めたラブレターのような広報湯前。ことし7月の表紙で元気な姿を見せてくれたのは佐々木あいりさん(湯前小5年=上里3)※左と石井愛子さん(同=中里2)。今回も表紙に負けないほどの笑顔

あなたに届くラブレター

特集2 協力隊リポート最終回「広報湯前」

リポーター 安井佳奈

毎月、月初めに届く「広報湯前」。私は2年8カ月の間、広報誌の1ページを使い、連載記事を書いてきました。最後はこの人。湯前町役場で広報湯前を作っている姫野宏太さん(28歳 中里2)。今回は、いつも取材している姫野さんを私が取材しました。

読みたくなる広報誌の継承

姫野さんはことしで広報担当6年目。納得するまで何度も写真を撮り、文章を添えて毎月広報誌を町民へ届けています。いつも目を引くような写真が載っていますが、実は広報担当になるまで写真には興味がありませんでした。前任者が作っていた「読みたくなる広報誌」に近づくため、せめて写真だけでも頑張ろうとカメラを買い、写真が好きになったといいます。

情報収集、取材交渉、写真撮影、文書作成など、広報はお仕事がたくさん。町のイベント、小・中学校の行事など、さまざまな場所へ向かうので「あ、カメラマンだ!」と子どもからも声をかけられるほど顔が知られています。

「読む側」のことを意識。文字ばかりだと読みにくいのですが、広報湯前は写真が多く、文章も分かりやすくなっています。読者の目の動きを考えて写真や文字を調整。内容は短くまとめ、中学生が読んでも分かるほど簡単になっています。雑誌を見るときに、まず目に入ってくるのが写真です。

写真が良くなければ誌面を最後までめくってもらえないし、文章も読んでもらえない」と話すように、どの写真も今にも動き出しそうなものばかり。取材に協力してくれた人が「広報に載ってよかった」と思ってもらえるよう、人の表情にもこだわります。

「取材に協力してくれた人や誌面を見てくれた人に『本物のファン』になってもいいです。多くの住民が町に関心を持って、町の良さをみずから発信できる誌面にしたい」と思っています。読む側の気持ちを考えて作ることが、読みやすさの秘密でした。

町の人と一緒に作る

広報湯前は住民がたくさん登場することも特徴の一つ。広報誌に自分の知っている人が載っていると、写真だけでなく、その人が何をしていたか読んでみたくなります。「町を輝かせているのは町の人。皆さんが取材できるような活躍をしてくれるからこそ、広

住民とまちをつなぐ

毎月読みたくなる誌面。イベント情報だけでなく、住民の活躍や挑戦なども掲載されています。活躍を追って、町内外どこへでも。裏では皆さんの取材や写真撮影が行われています。

取材は、カメラに三脚、レフ版、ノート、ペンなど持ち物がいっぱい。ノートは5年5カ月で14冊に積み上がりました。話している人の目を見て、耳でしっかり聞き、何気ない雑談までメモ。完成した記事を見ると、相手のしぐさまで文字になっていて、取材の状況がより伝わってきます。

本物の湯前ファンを増やしたい

広報誌を作るときは、町の情報を町民の皆さんに「伝える」のではなく「伝える」ことができません」と姫野さん。住民と一緒に作る気持ちを常に持ち続けています。

広報湯前はラブレター

姫野さんの「小さな発見やおもしろかったことなど、協力隊の目線で町の魅力を伝えてみませんか?」という一言で始まった私の連載。何度も取材に行き、写真の撮り方や取材の仕方を教えてもらいました。「毎月読んでるよ」「あの写真はよかったね」と言ってくれた広報湯前ファンもたくさんいます。写真・題名・文章。読者をぐっと引き込む記事を作ることには簡単ではありません。広報湯前は毎月、住民一人一人に届くラブレターのようなもの。姫野さんは今日も町や住民への愛情を誌面に込めています。

特集 あなたに届くラブレター(完)

湯前がもっと大好きになった取材。町の中でたくさん笑顔に出会い、私たちがたくさん笑顔になることができました



熊本県広報コンクールの広報紙・町村部では5年連続特選、今にも動きだしそうな写真も魅力